

## 福音書における「イエス自身のことば」を探る (1)「山上の説教」から

川崎医療短期大学 第一看護科\*, 川崎医療短期大学 一般教養\*\*

藤本十四秋\*・名木田恵理子\*\*

(平成10年10月9日受理)

A Search for the Words That Jesus Really Said by Reference to 'The Five Gospels'

(1) The Sermon on the Mount

Toyoaki FUJIMOTO\* and Eriko NAGITA\*\*

*The First Department of Nursing,  
Kawasaki College of Allied Health Professions,  
Kurashiki, Okayama 701-0194, Japan\**  
*Department of General Education,  
Kawasaki College of Allied Health Professions,  
Kurashiki, Okayama 701-0194, Japan\*\**  
(Received on October 9, 1998)

### 概 要

新約聖書の福音書の中で、「イエスが本当に言ったことば」を知ることは、イエスその人と教義の原点、そして言葉福音書の理解において、必須な課題となる。この理解の第一歩として、ここではイエスの教えとしてよく知られる「山上の説教」(マタイ 5-7章)を取り上げ、The Jesus Seminar: The Five Gospelsに準拠してイエス自身のことばを探るとともに、この章句におけるイエスのことばの分析・考察を試みた。

「山上の説教」の中でイエス真正のことばとされるのは、「誰かがあなたの右の頬を打ったら、左の頬をも差し出せ」を含む第5章 39-42節などに過ぎない。また、黄金律として有名な、第7章12節「自分が人々にしてほしいと望むように、人々にしてあげなさい」が実はイエスのことばではないと判定されているのも興味深い。

しかし、おそらくイエスのことばであろうと判断される箇所は多く、またイエスのことばではないが、イエスに基づいていると判断されるところを勘案すると、「山上の説教」がイエス自身のことばを軸にしながらも編集者の創作による加筆を得て、まとまりのある「イエスの教え」へと編集されていった経緯が窺われる。

またその中で、イエス独特の、斬新で生き生きとした語り口が浮かび上がってきて、人々の耳を歎かせたであろうと納得させられる。

### Abstract

To know what Jesus really said in the gospels helps us understand the heart of the teaching of Jesus. In this study, we discussed the words attributed to Jesus in 'the Sermon on the Mount (Matthew 5-7),' by reference to 'The Five Gospels,' where the Jesus

Seminar assessed each saying of Jesus in the gospels, including recently discovered Gospel of Thomas. There, only a few sayings are considered to be the real voice of Jesus, e. g., 'Don't react violently against the one who is evil: when someone slaps you on the right cheek, turn the other as well...(5: 39-42)' Furthermore, the saying that has been known as the Golden rule, 'Treat people in ways you want them to treat you,' is judged not to go back to Jesus.

In Matthew 5-7, however, we can see fairly many words probably originated with Jesus. Taking into consideration those which are not Jesus', but based on his own ideas and those created by the author of the Gospel, we've come to the conclusion that centering on Jesus' own sayings, 'the Sermon on the Mount' had been expanded and modified by his followers.

In the search for the real Jesus, we noticed distinctiveness of his sayings: they cut against the social and religious grain; they bring about surprise and shock; they are full of exaggeration, humor, and paradox. We are convinced that listeners were arrested by vividness and strangeness of his teaching.

## はじめに

いわゆる「死海文書 (Dead Sea Scrolls)」<sup>1)</sup>や「ナグ・ハマディ文書 (Nag Hammadi Library)」<sup>2)</sup>の発見は、その全公開には紆余曲折があり何十年という歳月を要したとはいえ、原始キリスト教の姿、並びに福音書成立の過程、ひいてはイエスの実像の探究において多大な貢献を果たしている。ところで、聖書の福音書は物語部分と語録 (言葉) 部分とで構成されているが、近年、言葉福音書の方に多くの関心が注がれるようになり、「イエス真正のことば」の探究が活発に行われるようになってきた。

それはまず、正典福音書の中の共観福音書 (Synoptic Gospels: マルコ, マタイ, ルカ) についての比較研究から、マタイとルカの両福音書が共通に準拠したと考えられるイエスの語録文書の存在が想定され、この仮設の文書、Q (Quelle; 資料を意味するドイツ語) が復元されたことによる<sup>3)</sup>。さらに、上記のナグ・ハマディ文書の主体であり、1945年コプト語の写本として発見された、トマスの福音書 (The Gospel of Thomas)<sup>4)</sup>の恩恵によるところが大きい。トマス福音書は、114のイエスの言葉からなる語録集と云える。Qと共にこのトマス福音書が、イエス真正のことばの探究に寄与してきているのである。すなわち、マタイ、ルカは、マルコの記したイエスの物語を軸に、Q資料と、さらにその時点でもまだ口承状態にあった言い伝えを集め、加筆、編集してそれぞれの福音書を集大成していった。そこで、これらの福音書を、トマス福音書やQと照らし合わせることによって、イエスの真の思想と各福音書の編集傾向もより明確に浮かび上がらせることができるのである。

このようななかで、1994年、聖書研究者によって構成された The Jesus Seminar (以下、セミナーとよぶ) が、正典福音書とトマスの福音書について「イエスが本当に言った言葉は何か」というテーマで検証していき、その探究結果を 'The Five Gospels' として刊行した<sup>5)</sup>。セミナーは、各福音書の計1500以上のイエスの言葉を点数化し、その得点総計によってイエスの言葉

を4分類した。すなわち、第一分類：イエス自身の言葉、第二分類：おそらくイエスの言葉であろう、第三分類：イエスが言った言葉ではないがイエスの思想を反映している、第四分類：福音書の編者の創作によるもの、である。驚くべきことには、セミナーは、福音書の中でイエスの言葉として収録されているものの82%が、実際にはイエスが言ったものではないと結論している。

この稿で、我々は‘The Five Gospels’の成果をもとに、イエスの言葉の代表的なものが収められているマタイ 5-7章（山上の説教）を中心に、真のイエスの言葉は何かを探ることにする（以下、4福音書については、それぞれ、マルコ、マタイ、ルカ、トマスとよぶ）。

なお、福音書の文面引用は‘The Five Gospels’の英文を使い、日本語訳はその英文に基づいて筆者らが行った。また、その英文および日本語訳において、字体はセミナーの判定を表している。すなわち、第一分類：アンダーライン付太字、第二分類：太字、第三分類：細字、第四分類：イタリック体字、である。

## 1. 祝福の言葉

### マタイ 5：1-12

<sup>3</sup>*Congratulations to the poor in spirit!*  
Heaven's domain belongs to them.

<sup>4</sup>*Congratulations to those who grieve!*  
They will be consoled.

<sup>5</sup>*Congratulations to the gentle!*  
They will inherit the earth.

<sup>6</sup>*Congratulations to those who hunger and thirst for justice!* They will have a feast.

<sup>7</sup>*Congratulations to the merciful!*  
They will receive mercy.

<sup>8</sup>*Congratulations to those with undefiled hearts!* They will see God.

<sup>9</sup>*Congratulations to those who work for peace!* They will be known as God's children.

<sup>10</sup>*Congratulations to those who have suffered persecution for the sake of justice!*

Heaven's domain belongs to them.

<sup>11</sup>“*Congratulations to you when they denounce you and persecute you and spread malicious gossip about you because of me.*”

<sup>12</sup>Rejoice and be glad! Your compensation is great in heaven. Recall that this is how they persecuted the prophets who preceded you.”

<sup>3</sup>心の貧しい人たちは幸いである。天国は彼らのものである。

<sup>4</sup>悲しんでいる人たちは幸いである。彼らは慰められるであろう。

<sup>5</sup>柔和な人たちは幸いである。彼らは地を受け継ぐであろう。

<sup>6</sup>義に飢え乾いている人たちは幸いである。彼らは満ち足りるであろう。

<sup>7</sup>あわれみ深い人たちは幸いである。彼らはあわれみをうけるであろう。

<sup>8</sup>心の清い人たちは幸いである。彼らは神を見るであろう。

<sup>9</sup>平和のために働く人たちは幸いである。彼らは神の子として知られるであろう。

<sup>10</sup>義のために迫害を受けてきた人たちは幸いである。天国は彼らのものである。

「<sup>11</sup>わたし故に、人々があなた方を罵り、あなた方を迫害し、またあなた方に関して悪意に満ちた陰口を広めるとき、あなた方は幸いである。

<sup>12</sup>喜び、喜べ。あなた方への報いは、天においては大きい。彼らはあなた方より前の予言者たちにも、このように迫害したということをおい起こしなさい」

マタイに収録されている山上の説教の冒頭部は、イエスの言葉の中でも有名なものであり、一気に語られた言葉のように見えるが、現在では、様々な場面でイエスの口から出た教えが集められていき、マタイ(福音書)の編集者によって加筆、編集されたというのが通説になっている。

マタイ5:1-12の中でも、3-10と11-12は採取源が違っていると思われる。というのは、3-10では三人称の相手に語りかけていて、文章も簡潔である。それに対して11-12はyouが対象で、文も散文的である。内容的にみても11-12は、福音に従うものに対する迫害に触れていて、イエスよりも後の時代に成立したものという感じがする。

さらに、マタイを、ルカ、トマスの対応箇所と比べてみる。マタイの5:1-12に該当しているのは、ルカ6:20-23, トマス54, 68, 69である(下掲)。

ルカ 6:20-23

Congratulations, you poor! God's domain belongs to you.

<sup>21</sup>Congratulations, you hungry! You will have a feast.

Congratulations, you who weep now! You will laugh.

<sup>22</sup>“Congratulations to you when people hate you and they ostracize you and denounce you and scorn your name as evil, because of the son of Adam! <sup>23</sup>Rejoice on that day, and jump for joy! Just remember, your compensation is great in heaven. Recall that their ancestors treated the prophets the same way.”

トマス

54: Jesus said, “Congratulations to the poor, for to you belongs Heaven's domain.”

68: Jesus said, “Congratulations to you when you are hated and persecuted; <sup>2</sup>and no place will be found, wherever you have been persecuted.”

69: Jesus said, *“Congratulations to those who have been persecuted in their hearts: they are the ones who have truly come to know the Father. <sup>2</sup>Congratulations to those who go hungry, so the stomach of the one in want may be filled.”*

これらに見られるように、祝福の言葉は、福音書によって少しずつ違っている。3福音書にほぼ共通してあるのは、「貧しい人」「飢えている人」「嘆き悲しむ人」に対する祝福である。

他の福音書に比べてマタイに特徴的なのは、まず、呼びかけが概ね「～する人たち」というところであり、これはルカやトマスの「あなた方」という二人称による直接的な呼びかけよりも一般論的な感じがする。

次に、「貧しい人」「飢えている人」の句に補足箇所がある (the poor in spirit, hunger and thirst for iustice)。in spirit や for justice が加わることで、物質的貧しきでなく心の貧しきとなり、肉体の空腹ではなく義に対する飢えという意味が加わってくる。ここでは、マタイは貧しきや飢えを社会的、経済的なものよりむしろ精神的なものとして解釈している。しかし、精神的な意味合いはイエスよりも後の時代の解釈で、実際の貧しきや飢えを想定したルカの方に元の形がとどめられていると考えられる。

三番目に、マタイには、「祝福の言葉」として他にはないものがある (the gentle, the merciful, those with underfilled hearts, those who work for peace)。この「柔和な人、あわれみ深い

人、心の清い人、平和のために働く人」に対する祝福は the poor, those who grieve, those who hunger and thirst などに対する祝福とは、趣が異なっている。すなわち、後者が苦しみからの解放という意味があるのに対して、前者は有徳に対する報いともいべきものを表している。これら有徳への報いの言葉は、古来より言われてきたことであり、貧しい人、飢えた人、嘆き悲しむ人に対する祝福のような意外性はない。イエスの教えは聴衆へ語りかける形で示された。そこでは当然、聞く耳を軟たせるということが必要だったであろう。すなわち「意外性がある驚きを生む、具体的で生き生きとした表現」が、イエスの言葉と判定されるのである。

これらのことを考慮に入れると、イエスが本当に語った言葉と断定できるのは、「貧しい人」「飢えている人」「嘆き悲しむ人」に対する祝福であり、また、マタイの祝福の言葉よりもそれに対応しているルカの祝福の言葉の方が簡潔でイエスの言葉に近いと結論される。

ただ、ルカの祝福の言葉の中には「非難の言葉」(6:24-26)が入っている。この「非難の言葉」は、おそらく、Qにあってマタイは採取しなかったがルカは採取したというのか、あるいは「祝福の言葉」に対比させてルカが創作したものか、のどちらかであろう。いずれにしても、セミナーは、これはイエスの言葉に由来しないと判断している。

トマスではこれらの「祝福の言葉」はまとまったものとして語られてはいないし、その順番も前後している。これによって、これらの言葉が、もともとそれぞれ違った場面で、違った意味で語られていたものであり、それがQ資料の段階で1つにまとめられ、マタイやルカが脚色、発展させたというセミナーの説が、いっそう確かなものになってくる。

## 2. 地の塩、世の光

### マタイ 5:13-16

<sup>13</sup>*You are the salt of the earth. But if salt loses its zing, how will it be made salty? It then has no further use than to be thrown out and stamped on.*

<sup>14</sup>*You are the light of the world. A city sitting on the top of a mountain can't be concealed. <sup>15</sup>Nor do people light a lamp and put it under a bushel basket but on a lampstand, where it sheds light for everyone in the house. <sup>16</sup>That's how your light is to shine in the presence of others, so they can see your good deeds and acclaim your Father in the heavens."*

「<sup>13</sup>あなた方は地の塩である。しかしもし、塩がぴりっとしたところを失ってしまったら、塩はどのようにして塩味になるだろうか。塩味のない塩はもはや何の役にもたたず、投げ捨てられ、踏みつけにされるより他ないのである。

<sup>14</sup>あなた方はこの世の光である。丘の頂に建っている町は隠されることができない。

<sup>15</sup>人々は灯火をともし、それを柵の下に置いたりせず、燭台の上に置く。そうすれば灯火は、家のなかにいる者すべてを照らす。

<sup>16</sup>このようにあなた方の光が人々の前で輝くようにするのである。そうすれば彼らは、あなた方のよい行いを見て天の父を誉め讃えるであろう」

マタイのこの2つのたとえは、マルコ、ルカ、トマスにおける対応箇所がばらばらであるところから、元来別個に語られていたものだと分かる。マタイはこれらのたとえをまとめて編集、

加筆している。最初の一文「あなた方は地の塩である」は、有名な言葉であるが、セミナーはマタイの創作と判断している。それは、マタイ 5: 13 に対応する、ルカ 14: 34-35, マルコ 9: 50a いずれにおいても、この文を欠いているからである。マタイは「あなた方は地の塩である」という文を最初に置くことで、「塩味のたとえ」を、世界におけるキリスト者の存在の意義という、元の意味とは違ったものにしていく。

5: 14 の冒頭の文もまた、他の福音書には見られず、マタイ独自のものと判断されている。

それに続く 5: 14b は、トマス 32 に単独で収録され、5: 15 は、ルカ 11: 33, マルコ 4: 21, トマス 33: 2-3 に共通していることから、口承時代からのイエスの言葉ではないかと考えられる。

次に、5: 16 については、ルカ 11: 34-36, マルコ 4: 22-23 に対応する箇所があるが、コンテキスト、構成が異なるうえに、内容が「立派な行いに対する報い」という、マタイに特徴的なものになっている。この部分はマタイの創作と判断するのが妥当であろう。

### 3. 愛敵の言葉

マタイ 5: 17-20 は、イエスが新しい律法を語る序文の役目を果たしているが、マタイによる創作と判断されている。そのあと (5: 21 以下) は、始めに旧約聖書の律法を置き、それに対して 'But I tell you' とイエスが語り始めるという設定で、6つの教えが続いている。

- (1) 5: 21-26 「腹をたててはいけない」
- (2) 5: 27-30 「姦淫してはならない」
- (3) 5: 31-32 「離婚してはならない」
- (4) 5: 33-37 「誓ってはならない」
- (5) 5: 38-42 「復讐してはならない」
- (6) 5: 43-48 「敵を愛しなさい」

セミナーの判定では、上記 (1)-(6) のうち、(1)-(4) は、25-26 を除いて、イエスの言葉ではなく、イエスの教えに沿って、あるいは編集者が独自に、編集したものとなっている。25-26 は、ルカ 12: 58-59 に対応していてイエスの言葉と考えられるが、文脈上前の部分とのつながりが希薄であるところから、マタイ編集時にここに入れられたものであろう。

そこで、これら6つの新しい律法の中で主にイエスの言葉と考えられているのは、次の (5) と (6) (マタイ 5: 38-48) である。

#### マタイ 5: 38-48

<sup>38</sup>“As you know, we once were told, ‘An eye for an eye’ and ‘A tooth for a tooth.’

<sup>39</sup>But I tell you: Don't react violently against the one who is evil: when someone slaps you on the right cheek, turn

「<sup>38</sup>知ってのとおり、私たちは『目には目を、歯には歯を』と教えられた。<sup>39</sup>しかし、私はあなた方に言う。邪悪な人に対して暴力で手向かうな。誰かがあなた方の右の頬を打ったら左の頬も差し出さなさい。<sup>40</sup>誰かが下着

the other as well. <sup>40</sup>When someone wants to sue you for your shirt, let that person have your coat along with it.

<sup>41</sup>Further, when anyone conscripts you for one mile, go an extra mile.

<sup>42</sup>Give to the one who begs from you; and don't turn away the one who tries to borrow from you."

<sup>43</sup>"As you know, we once were told, 'You are to love your neighbor' and 'You are to hate your enemy.' <sup>44</sup>But I tell you: Love your enemies and pray for your persecutors. <sup>45</sup>You'll then become children of your Father in the heavens. <God> causes the sun to rise on both the bad and the good, and sends rain on both the just and the unjust. <sup>46</sup>Tell me, if you love those who love you, why should you be commended for that? Even the toll collectors do as much, don't they? <sup>47</sup>And if you greet only your friends, what have you done that is exceptional? Even the pagans do as much, don't they? <sup>48</sup>To sum up, you are to be unstinting in your generosity in the way your heavenly Father's generosity is unstinting."

を取ろうとしたら、上着もいっしょに持たせなさい。<sup>41</sup>さらに、誰かがあなたを1マイル行かせようと強いるなら、もう1マイル余分に行きなさい。<sup>42</sup>そして、あなた方からもらおうとする者には与えなさい。そして、あなた方から借りようとする者から逃げてはならない

「<sup>43</sup>知ってのとおり、私たちは嘗て『隣人を愛し、敵を憎めよ』と教わった。<sup>44</sup>しかし、私はあなた方に言う。あなた方の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。<sup>45</sup>そうすれば、あなた方は、天の国で父の子となるであろう。神は悪人にも善人にも平等に太陽を昇らせてくれる。正しい人にも正しくない人にも両方に雨を降らせてくれる。<sup>46</sup>もしあなた方があなた方を愛する人を愛しても、なぜそのことで報われようか。徴税人でさえ同じことをするのはではないか。<sup>47</sup>また、あなた方が友にのみ挨拶をしても、何か特別なことをしたことになるだろうか。異邦人でも同じようなことをするのはではないか。<sup>48</sup>要するに、天の父の寛容さが完全であるように、あなた方は寛容さにおいて完全でありなさい」

ここでイエスは同害報復という古代社会のルールに反して、報復を否定している。当時の社会的、宗教的常識に反することを言って、衆目を集めるのがイエスの語りの特徴である。その意味から、この部分は総じてイエス本人の言葉であるといつてよい。ただ、それを編集するためにマタイの言葉が入っている。まず、5:38は、前述の語りと同様に、導入として入れられたものである。また、45や47-48の文言は、イエスの教えに基づくがイエスによって語られたのではないという評価を受けている。それは、イエスの教えには理由づけや目的の指示はなく、ただ行為の指示があるだけなのに、この箇所は神の報いについて言及しているからである。

ルカでは、マタイのこの部分に対応する言葉は、前記「祝福の言葉」の後に語られ、しかもマタイとは構成が逆である。すなわち、まず愛敵の教えが示され、その具体的展開として頬を打たれよ、とか上着を差し出せ、という無抵抗の勧めが続いている(下掲)。

ルカ 6:27-38

<sup>27</sup>"But to you who listen, I say, love your enemies. do favors for those who hate you, <sup>28</sup>bless those who curse you, pay for your abusers. <sup>29</sup>When someone strikes you on the cheek, offer the other as well. When someone takes away your coat, don't prevent that person from taking your shirt along with it. <sup>30</sup>Give to everyone who begs from

**you:** and when someone takes your things, don't ask for them back. <sup>31</sup>Treat people the way you want them to treat you. <sup>32</sup>If you love those who love you, what merit is there in that? After all, even sinners love those who love them. <sup>33</sup>And if you do good to those who do good to you, what merit is there in that? After all even sinners do as much. <sup>34</sup>If you lend to those from whom you hope to gain, what merit is there in that? Even sinners lend to sinners, in order to get as much in return. <sup>35</sup>But love your enemies, and do good, and lend, expecting nothing in return. *Your reward will be great, and you'll be children of the Most High. As you know, he is generous to the ungrateful and the wicked.* <sup>36</sup>Be compassionate in the way your Father is compassionate. <sup>37</sup>*Don't pass judgment, and you won't be judged; don't condemn, and you won't be condemned; forgive, and you'll be forgiven.* <sup>38</sup>*Give, and it will be given to you: they'll put in your lap a full measure, packed down, sifted and overflowing.* For the standard you apply will be the standard applied to you."

この箇所でも、マタイ5:39-42と、ルカ6:29-30は並行していて、どちらもイエス自身の言葉とされている。ただし、マタイ5:41の「1マイル行かせようと強いられたら、もう1マイル余分に行きなさい」という言葉はルカにはない。これは、この部分がローマ支配下での徴用について言っていることから、ルカがローマ人への布教を考えて削除したものと、セミナーは推測している。

マタイ5:42は、ルカ6:30a, 34, 35cおよび、トマスの95:1-2に共通していることから、イエスの言葉とされている。

マタイ5:43-48(愛敵の項)は、ルカ6:27-28, 32-38と対応している。

こうしてみると、共通箇所の多きから、マタイもルカもQを採取源としているのはほぼ間違いのないところであろう。マタイとルカでは構成が逆になっているので、両者に共通する部分がイエスの言葉であり、残りの部分は文脈組み立てのために補足されたと考えられる。

さて、マタイ5章の「山上の説教」に対応しているのが、ルカでは「平地の説教」(6:20-26)とその関連節27-38を中心とする部分である。両者において、「イエス真正のことば」とされるものは、具体的で力強く、聴く者に鮮烈で生々しい印象を与えていて、後世の聖書編集者の意図が反映している箇所とはひびきを異にしている。また、マタイとルカにおける対応部分の比較では、神の報いを強調し、終末思想の色濃いマタイに対して、ルカの方が簡潔な表現であり、イエスの言葉をより忠実に残しているといえる。

#### 4. 祈りの言葉

マタイ6:1-4の中では、「あなたは施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知らせてはならない」(6:3)という箇所がイエスの言葉と判定されている。これは、たとえとしての奇抜さもあり、また、ほぼ同じ形でトマスにも収録されていることによる(62:1-2)。この言葉を中心としてマタイは「慈善を見せびらかしてはならない」という教えを組み立てている。その中には「そしてあなた方の父は、隠れたものを見ることができるので、あなた方に報



いてくださるだろう」(6:4)のように、善行に対する神の返報について述べたところもあって、マタイの特徴が見られる。

これに続いて、祈りについての教え(6:5-15)が語られている。まず、6:5-8で、善行は人に見せるためのものではなく、また自己満足のために行うものでもないことが繰り返されている。これは、前出の1-4と内容的にも修辭的にも同じであり、マタイの創作によるとされている。セミナーがイエスの言葉であると判断しているのは、主に祈りの文言の部分である(下掲)。

### マタイ 6:9-13

<sup>9</sup>*Instead, you should pray like this: **Our Father** in the heavens, your name be revered.*

<sup>10</sup>*Impose your imperial rule, enact your will on earth as you have in heaven.*

<sup>11</sup>*Provide us with the bread we need for the day.*

<sup>12</sup>*Forgive our debts to the extent that we have forgiven those in debt to us.*

<sup>13</sup>*And please don't subject us to test after test, but rescue us from the evil one.*

<sup>9</sup>かわりに、このように祈りなさい。

天におられる**私たちの父よ**、  
あなたの名があがめられますように。

<sup>10</sup>御国が来ますように。

あなたの意志が天に行われるとおり、  
地にも行われますように。

<sup>11</sup>私たちがその日必要としている食物を、お与え下さい。

<sup>12</sup>私たちに負債のある者を許しましたように、  
私たちの負債もお許しください。

<sup>13</sup>次々に私たちに試練を受けさせないでください。そして、  
邪悪なものから私たちをお救いください。

この祈りの文言は、内容的にはルカと共通していて(下掲)、Q資料が採取源であり、ほぼイエスの言葉とされる。マタイとルカの文の類似性からみると、もう既にQの段階でこれらの言葉はかなりまとまった形で伝承されていたと思われる。

### ルカ 11:2-4

**Father**, your name be reverd.

Impose your imperial rule.

<sup>3</sup>Provide us with the bread we need day by day.

<sup>4</sup>Forgive our sins, since we too forgive everyone in debt to us. And please don't subject us to test after test.

特に、当時ユダヤ教では祈るとき神々の名をすべて並べたてていたことから、この祈りの中の短い呼びかけは、民衆には衝撃的であったと思われる。マタイの **Our Father in the heavens** という呼びかけは、ルカでは **Father** と、さらに短いものとなっている。in the heavens はマタイの好んで用いた語であり、イエス自身はルカにあるように Father とのみ呼びかけたと考えられる。また、ルカと比べ、マタイではかなり補足が行われていることが分かる。

しかし、「その日必要としている食物」が、ルカでは「日々必要としている食物を」に、「負債をお許しください」が「罪をお許しください」にかわっている。食物について「その日一日

の」という方が「日々の」という長期的な意味よりも神への信頼の深さを感じさせる。また、「負債」に関しては、当時の貧しい、負債をかかえた人たちへの救済の言葉としての方が現実感があり、「罪」というような道徳的な意味ではなかったと判断される。ここでは、マタイの方がイエスの言葉としてかなっている。

ただ、マタイの祈りの文言のあとには、「なぜなら、もしあなた方が他人の失敗や罪を許すならば、あなた方の天の父もあなた方の失敗や罪をお許しになるだろうから。そしてもしあなた方が他の人の失敗や過ちを許さないならば、あなた方の父もあなた方の失敗や過ちをお許しにならないだろう」(6:14-15)とあり、行動の善悪で因果応報的に神が行動するということは、イエスの言葉とは思われない。

次節の6:16-18は、「断食をするとき、断食していることを人に知られないようにせよ」という内容で、善行は密に行うべきであるという教えも、語りの構成も、6:1-4, 5-6と共通している。これもマタイの創作と考えられている。

マタイ6:19-21の「あなた方は自分のために、虫が食い、さびがつき、また盗人らが押し入って盗み出すような地上に宝を貯えてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また盗人らが押し入って盗み出すことない天に、宝を貯えなさい。あなた方も知っているように、あなた方の宝のある所には、心もあるからである」、および6:22-23の「目は体の灯火である。だから、あなたの目が澄んでいれば、全身も明るいだらう。しかし、あなた方の目が曇ってれば、全身も暗闇に包まれるだろう。だから、もしあなた方の内なる光が暗ければ、その暗さはどんなであらう」はルカにも対応していて、Qが採取源と考えられるが、地上にではなく天上に宝を蓄えよとか、目が体への光の入口であり、光は善、暗闇は悪の象徴というのは、当時一般的に常識として受け取られていたので、セミナーは、イエス独自の言葉だと断定はできないとしている。

## 5. 空の鳥、野の花

### マタイ 6:24-34

<sup>24</sup>"No one can be a slave to two masters. No doubt that slave will either hate one and love the other, or be devoted to one and disdain the other. You can't be enslaved to both God and a bank account!

<sup>25</sup>"That's why I tell you: Don't fret about your life—what you're going to eat and drink—or about your body—what you're going to wear. There is more to living than food and clothing, isn't there?

<sup>26</sup>Take a look at the birds of the sky: they don't plant or harvest, or gather

「<sup>24</sup>だれも同時にふたりの主人の僕となることはできない。必ず一方を憎んで他方を愛し、あるいは、一方に親しんで他方をうとんじるからである。あなた方は神と富とに同時に仕えることはできない。

「<sup>25</sup>そういうわけであなた方に言うが、何を食うか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらうな。また、何を着ようかと自分の体のことで思いわずらうな。食物や衣服よりもっと多くのものが命にはあるではないか。<sup>26</sup>空の鳥を見なさい。彼らは蒔くことも刈ることも、倉に貯えることもしない。しかしながら、天の父は彼らに食べ物を

into barns. Yet your heavenly Father feeds them. You're worth more than they, aren't you? <sup>27</sup>Can any of you add one hour to life by fretting about it? <sup>28</sup>Why worry about clothes? Notice how the wild lilies grow: they don't slave and they never spin. <sup>29</sup>Yet let me tell you, even Solomon at the height of his glory was never decked out like one of them. <sup>30</sup>If God dresses up the grass in the field, which is here today and tomorrow is thrown into an oven, won't <God care for> you even more, you who don't take anything for granted? <sup>31</sup>So don't fret. Don't say, 'What am I going to eat?' or 'What am I going to drink?' or 'What am I going to wear?' <sup>32</sup>*These are all things pagans seek. After all, your heavenly Father is aware that you need them.* <sup>33</sup>*You are to seek <God's> domain, and his justice first, and all these things will come to you as a bonus.* <sup>34</sup>*So don't fret about tomorrow. Let tomorrow fret about itself. The troubles that the day brings are enough."*

与えてくださる。あなた方は鳥たちより価値のあるものではないのか?<sup>27</sup>あなた方のうち誰が、そういったことを思いわずらうことによって自分の寿命を1時間でも延ばすことができようか。<sup>28</sup>あなた方はなぜ着るものの中で思いわずらうのか。野の百合がどのように育っていくのか気をつけてみなさい。百合は、働きもせず、紡ぎもしない。<sup>29</sup>それなのに、あなた方に言わせてください。栄華の極みにあるソロモンでさえ、この花の1つほどにも着飾ってはいなかったと。<sup>30</sup>もし神が、ここに今日咲いていて明日には炉に投げ入れられる野の草にも、このように着飾ってくださるのなら、どうしてあなた方のことをもっと構って下さらないことがあろうか。あなた方、何物も当然のごとく受け取ることのできない者たちよ。<sup>31</sup>それだから思いわずらってはならない。何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言ってはならない。<sup>32</sup>これらはすべて異邦人が求めることである。結局のところ、あなた方の天の父は、あなた方が必要としているものに気付いておられるのだ。<sup>33</sup>あなた方はまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのことすべてが思いがけない贈り物としてあなた方のもとにやってくるだろう。<sup>34</sup>だから、明日のことに思いわずらうな。明日のことは明日自身に思いわずらわせなさい。今日の日のもたらす苦勞だけで十分である」

6: 24 は、イエスの語りにも特徴的な三部形式を採っていること、ルカの16: 13とトマス 47: 2においても対応箇所があることから、おそらくイエスの言葉であろうと考えられる。ただし、この言葉は各福音書で異なった文脈の中に入れ込まれている。

6: 25-30 は、ルカでは「金持ちの農夫」のたとえ話のあとにイエスが語ったコメントとして配置されている (12: 22-31)。また、トマスにも同様の言葉がみえる (36: 1-4)。このように、文脈的には違っているが、採取源がQとトマス両方にあることから、イエスの言葉としてかなり信頼がおける。また、空の鳥や野の花のありようを、人間にも当てはめるといふ誇張表現があり、言葉も直接的で力強い。これはイエスの語りの特徴である。さらに、神に対する絶対的信頼と地上の富の放棄を表しているのはイエスの教えの中心であることから、イエスの言葉だと確信されている。因に、この箇所は聖書の中で最も文学的で、ロマンに満ちた記述だと評されている。

6章の終わりの節 31-34 の文言は説明的で、語りかけの力強さに欠けていることに加え、神の報いを強調しているところから、イエスの言葉ではないと評定されている。

## 6. 友の目の中のちり

マタイ 7: 1-5

"Don't pass judgment, so you won't be judged. <sup>2</sup>Don't forget, the judgment you hand out will be the judgment you get back. And the standard you apply will be the standard applied to you. <sup>3</sup>Why do you notice the sliver in your friend's eye, but overlook the timber in your own? <sup>4</sup>How can you say to your friend, 'Let me get the sliver out of your eye,' when there is that timber in your own? <sup>5</sup>You phony, first take the timber out of your own eye and then you'll see well enough to remove the sliver from your friend's eyes."

「人を裁くな。そうすれば自分も裁かれな  
であろう。<sup>2</sup>忘れるな、あなたが裁きを加え  
れば逆にそれは、裁きがあなた方に返って  
くる。そしてあなた方が適用した基準はあなた  
方にも適用されるであろう。<sup>3</sup>なぜ、友の目  
にあるちりに気付いても、自分の目にある梁を  
見過ごしてしまうのか。<sup>4</sup>自分の目に梁がある  
のに、どうして友に向かって『あなたの目から  
ちりをとらせてください』と言えようか。

<sup>5</sup>あなた方、偽善者よ、まずあなた方自身の目  
から梁を取り除きなさい。そうすれば、あな  
た方はよく見えるようになって、友の目から  
ちりを取り除くことができるだろう」

「友の目の中のちり」と「自分の目の中の梁」についてのたとえは、マタイ(7: 1-5)、ルカ(6: 41-42)、トマス(26: 1-2)において、少しずつ文言の違いはあるものの、共通して使われている。目の中の梁という誇張表現もイエスの言葉の特徴である。またイエスは行動の基準として、他者に対する叱責よりも許しの重要性を説いている。これらの点から、この言葉はイエスに由来するものとして信用度が高い。セミナーは、3つの福音書の中では、最も単純な語りになっているトマスが、オリジナルに近いとしている。

7: 1-2 がイエスの言葉ではないと判断されているのは、裁きの報復という概念がイエスのものではないからである。

前話に続くマタイ7: 6「聖なるものを犬に与えるな。また、豚に真珠を投げ与えるな。さもないとやつらは真珠を踏みしだき、向き直ってあなた方にかみついてくるだろう」は、トマス93にも収録されているものの、イエスの言葉としての確信は与えられていない。それは、豚も犬も古代においては不浄な動物と考えられ、社会的あるいは宗教的に汚れたものの比喩とされたのだが、不浄はイエスの他の言葉では拒否されるものではなく、抱擁すべきものとして考えられているからである。

## 7. 求めよ、そうすれば与えられるであろう

マタイ 7: 7-11

<sup>7</sup>"Ask—it'll be given to you; seek—you'll find; knock—it'll be opened for you.  
<sup>8</sup>Rest assured: everyone who asks receives; everyone who seeks finds; and for the one who knocks it is opened.  
<sup>9</sup>Who among you would hand a son a

「<sup>7</sup>求めよ、そうすれば与えられるであろう。  
捜せ、そうすれば見出すであろう。叩けよ、  
そうすれば開かれるであろう。<sup>8</sup>安心していな  
さい。求める者はみな得、捜すものはみな見  
出し、叩く者はみな開けてもらえるのだか  
ら。<sup>9</sup>あなた方の中で誰が、自分の子が求めて

stone when it's bread he's asking for?  
<sup>10</sup>Again, who would hand him a snake when it's fish he's asking for? Of course no one would! <sup>11</sup>So if you, shiftless as you are, know how to give your children good gifts, isn't it much more likely that your Father in the heavens will give good things to those who ask him?"

いるのがパンであるのに、石を与えたりするだろうか。<sup>10</sup>また誰が、求めているのが魚なのに蛇を与えたりするだろうか。むろん、誰もそのようなことはしない。<sup>11</sup>そのように、あなた方はつまらない者であるが、あなた方が自分の子供にはよい贈り物をするすべを知っているのなら、天の父はなおさら、求める者によい物をくださるだろうと思えないだろうか」

Ask and be given, seek and find, knock and be opened の三部構成句は、マタイとルカ (11: 9-10) でほぼ一致している。ただし、後半のたとえのところ、マタイはパンに対して石、魚に対して蛇を挙げているのに対し、ルカは魚に対して蛇、卵に対してきそりを挙げている。

トマスではこれらの言葉は、それぞれ別の章に収録されている。

2: 1-2 "Those who seek should not stop seeking until they find. <sup>2</sup>When they find, they will be disturbed. <sup>3</sup>When they are disturbed, they will marvel, <sup>4</sup>and will reign over all."

92: 1-2 "Seek and you will find. <sup>2</sup>In the past, however, I did not tell you the things about which you asked me them. Now I am willing to tell them, but you are not seeking them."

94 "One who seeks will find, <sup>2</sup>and for [one who knock] it will be opened"

トマスでのありようから、上記3つの句は、もともと別々に語られていたものと思える。しかし、Qの段階ではもう既にまとめられていたのであろう。いずれにしても、愛と寛容という内容、三部構成での短く印象的な展開といった点から、これらの言葉はイエスによって語られたものと考えてよからう。

## 8. 黄金律

マタイ 7: 12

<sup>12</sup>"Consider this: Treat people in ways you want them to treat you. *This sums up the whole of the Law and the Prophets.*"

「<sup>12</sup>このことをよく考えにいれなさい。自分が人々にしてほしいと望むように、人々にしてあげなさい。これが、律法であり、予言のすべてである」

黄金律 (Golden rule) として非常によく知られた言葉であり、ルカ 6: 31にもほぼ同じ形で載せられている。しかしながらこれがイエスの言葉であるという確証はない。黄金律そのものが目新しいものではなく、ユダヤ教の中にもあった。そして、「右の頬を打たれば左の頬も」、「金を貸した人から返してもらおうと思うな」(マタイ 5: 39-42) というような言葉に比べ、功利的であり、新鮮な驚きはない。そういうわけで、セミナーはこれを第三分類としてい

る。

また、トマス6:3では、“and don't do what you hate”となっていて、同じ意味でも否定文で表されているところから、ここは、セミナーは第四分類にしている。

## 9. 狭い門から入れ

マタイ 7:13-14

<sup>13</sup>“Try to get in through the narrow gate. Wide and smooth is the road that leads to destruction. The majority are taking that route. <sup>14</sup>Narrow and rough is the road that leads to life. Only a minority discover it.”

「<sup>13</sup>狭い門から入れ。滅びにいたる道は広く平坦である。そして、そこから入っていく者が多い。<sup>14</sup>命にいたる道は狭く、荒れている。そして、それを見出す者はほんの少数である」

マタイは黄金律を一応「山上の説教」の結論とし、7:13からは、教えの実行に当たっての方法を提示している。「狭い門から入れ」という言葉はそのために示されている。

この文言は、マタイとルカに収録され、Qが採取源とされている。セミナーは、ルカ13:24 “Struggle to get in through the narrow door; I'm telling you, many will try to get in, but won't be able”. (狭い戸口から入ろうと努めなさい。多くの人が入ろうとするが、入ることができないだろうと言っているのです)の方がイエスに近い言葉であるとしている。マタイでは、狭い門への道を命にいたる道とし、広き門への道を破壊への道として、教訓的な教えとして対比させているところが、Qを脚色していると判断されたのである。

## 10. 羊の皮をかぶった狼

マタイ 7:15-20

<sup>15</sup>“Be on the lookout for phony prophets, who make their pitch disguised as sheep; inside they are really voracious wolves.”

<sup>16</sup>You'll know who they are by what they produce. Since when do people pick grapes from thorns or figs from thistles?

<sup>17</sup>Every healthy tree produces choice fruit, but the diseased tree produces rotten fruit. <sup>18</sup>A sound tree cannot produce rotten fruit, any more than a rotten tree can produce choice fruit. <sup>19</sup>Every tree that does not produce choice fruit gets cut down and tossed on the fire. <sup>20</sup>Remember, you'll know who they are by what they produce.”

「<sup>15</sup><sup>にせ</sup>偽予言者を警戒せよ。彼らは羊の衣を着てあなた方のところに来るが、その内側は強欲な狼である。<sup>16</sup>あなた方は、その実によって彼らを見分けるであろう。茨から葡萄を、あざみからいちじくを採ることができる者があるだろうか。<sup>17</sup>よい木はどれでもよい実をならせるが、悪い木は腐った実をならせる。<sup>18</sup>よい木が腐った実をならせることはないし、悪い木がよい実をならせることもない。<sup>19</sup>よい実をならせることのできない木はすべて切られて火にくべられる。<sup>20</sup>覚えておきなさい、あなた方は、彼らがどんな実をならせるかによって、彼らを見分けるのである」

この中で、マタイの7：16b「茨から葡萄を、あざみからいちじくを採ることはできる者があるだろうか」という言葉のみが、ルカ6：44b、トマス 45：1aに一致していて、たとえのおおげさな点からも、イエスの言葉であろうと評定されている。

このあとマタイ7章の終わりまで（7：21-29）すべて、マタイの創作であるとされている。それは終末思想が色濃いこと、教えに従う者のみが天国に入れるという分別化、因果応報的発想が見られるからである。

## むすび

本稿では、聖書の言葉福音書の中で最もイエスの言葉らしいと思われ、事実、イエスの教えの代表的なものとして位置づけられている「山上の説教」（マタイ 5-7）について検証を試みた。その結果、実際にイエス自身の言葉と判定される箇所は「愛敵の言葉」など一部に過ぎないことが分かった。ただし、おそらくイエスの言葉であろうと考えられる「祝福の言葉」「塩味と灯火」「祈りの言葉」「空の鳥、野の花」「目の中のちり」「求めよ、そうすれば与えられる」などを加えると、全体ではかなりの部分にイエスの言葉が盛られていることも分かる。また、さらにイエスの言葉ではないがイエスに基づくものを勘案していくと、マタイ 5-7章が、イエスの言葉を主軸にしてひとつのまとまった、説得力のある「教え」として構成されていたことが窺われる。しかしながら、古来イエスの言葉として親しまれてきた名言「あなた方は地の塩である」や「自分が人々にしてほしいと望むように、人々にしてあげなさい」（黄金律）などが実はイエスによるものではないということは、興味深く、驚きを禁じ得ない。

各福音書はその大筋においては一致しているものの、イエスの言葉と、それらが語られている文脈などには、かなりの食い違いがある。それは、各福音書が、口伝をもとにそれぞれの時代や思想を反映させながら、編集されたことによる。イエスの言葉の改変は、口伝の段階で行われたものもあり、また収録する段階で行われたものもある。たとえば、別個に語られたイエスの教えやたとえを、共通の単語あるいは思想がある場合にはまとめ、それに説明やつなぎの状況を加筆する。またイエスの言葉を、元の文脈から別な文脈へと移動させるということがあるが、そこに編集者の意図が大いに入り込み、それによってイエスの言葉の意味するところが変わってしまった可能性がある。また、社会状況や時代に合わせて、厳しい教えをやさしくしたり、新たな解釈を加えたり、ということもあったと思われる。さらに、編集者が自分の考えや古来よりの伝承を、イエスが言ったものとして収録することもあったようである。これらのことは従来言われてきたことだが、セミナーの判定によってより明確になったといえよう。

このような考察の中で、イエスの教えとしてより強烈に押し出されてくるのは、差別化のない無償の「愛」である。それはマタイやルカが改変した部分と比べてみると、より際だっている。また、この中で、イエスの発話の特徴といったものがより明確になっている。すなわち、短く挑発的な文言を使い、覚えやすいたとえや逸話で語り、当時の社会的、宗教的枠に反し、普通とは違う教えによって驚きや衝撃を生む、誇張、ユーモア、パラドックスに満ちている、

イメージが具体的で、比喩表現が多く生き生きとした語り口である、ことなどである。

ところで、聖書を解体し、そこからイエスの言葉のみを抽出しても、それは形骸を見るに過ぎないのではないかといった批判や、一方、宗教者・教会関係者からは、イエスの言葉を詮索することはイエスの権威に関わることとして、ある種の抵抗が示されるかも知れない。このようなことは、死海文書が発見されて以後、教会側がその公表を長年に亘って抑えていたという事実とも相通するものがあるような気がする。

しかしながら実際にイエスの言葉の探究をしていった結果、我々は聖書の中のイエス像がより鮮明に浮かび上がってくることに気付くのである。しかもそれは、形骸でなく、そこから活力と輝きを発している聖書の骨格として現われてくる。マタイ福音書の編者が「山上の説教」の最終節（マタイ7：28-29）で締めくくったと考えられる記述、「イエスが説教をし終えると、群衆は彼の説法にひどく驚かされた。それは、彼の説法が、彼らの律法学者の説き方とは違って、イエス自身の権威のもとに説かれたからである」には、我々としても大いに共感を覚えるものである。

#### 文 献

- 1) Baigent M and Leigh R, 高尾利数 (訳) : 死海文書の謎. 東京, 柏書房, 1992
- 2) 荒井献 : トマスによる福音書. 東京, 講談社, 1994
- 3) Mark L B : The Lost Gospel : The Book of Q & Christian Origins. New York, HarperSan Francisco. 1993
- 4) The Gospel of Thomas : The Hidden Sayings of Jesus. Translation, with introduction, critical edition of the Coptic text & Notes by Meyer, M W, with an interpretation by Bloom H. New York, HarperSanFrancisco. 1992
- 5) Funk R W, Hoover R W and the Jesus Seminar : The Five Gospels : The Search for the Authentic Words of Jesus. New York, Scribner. 1996